地域で輝く賀茂のカリスマ！

カモスマ！

静岡県賀茂地域局

賀茂のカリスマ

賀茂地域局が令和元年度に実施した「賀茂地域未来づくりアンケート」の結果の中では、「働く場所がない」「活躍できる場がない」との声が多く上がりました（アンケート概要は P.02）。しかし、自分のやりたい仕事をいきいきとしている、地域の資源を生かした仕事をしている、地域に魅力を感じ、地域にこだわって活躍している賀茂地域で輝く「輝く大人」=「賀茂のカリスマ（カモスマ）」は大勢います。そんな「カモスマ」を地域の人たちに発信することで、この地域での仕事や活躍できる場、ライフスタイルを再認識してもらい、賀茂地域に住み続けたいと思えるきっかけになることを期待しています。

この冊子は、そんなカモスマを紹介するために、伊豆新聞下田版に掲載した全 12 回の記事をまとめたものです。併せて、インタビューの様子をまとめた動画を「静岡県公式 YouTube チャンネル」で発信しています。ぜひ記事と合わせて動画もご覧ください。

目　次

page

令和元年度賀茂地域未来づくりアンケート結果（抜粋）……02

伊豆新聞下田版「賀茂のカリスマ」……03 ～ 14

1　天花（下田市）／下田芸者……03

2　森　広志（南伊豆町）／樹木医……04

3　松原　淑美（南伊豆町）／ゲストハウス経営……05

4　高橋　幸村（松崎町）／農業……06

5　中島　繁（西伊豆町）／食品製造加工……07

6　千葉　兼如（河津町）／住職……08

7　小池　美帆（東伊豆町）／訪問看護・介護……09

8　鈴木　達志（西伊豆町）／自然体験コーディネイト……10

9　後藤　清也（河津町）／フラワーアーティスト……11

10　松本　潤一郎（松崎町）／アクティビティツアー・宿泊…12

11　佐藤　潤（下田市）／デザイナー……13

12　荒武　優希（東伊豆町）／地域コーディネーター……14

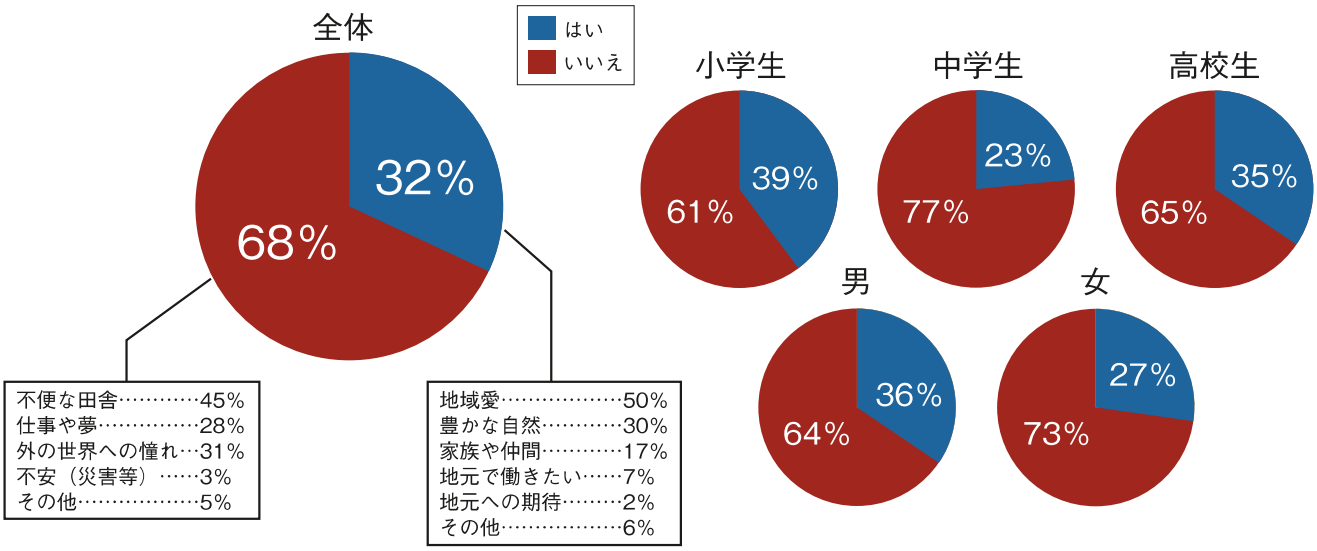
令和元年度賀茂地域未来づくりアンケート結果（抜粋）

賀茂地域局では、人口減少や少子高齢化など賀茂地域の課題に取り組むきっかけづくりのため、令和２年度に様々な対象へ向けアンケートを実施しました。「賀茂のカリスマ」もこのアンケート結果がきっかけとなっています。
詳しい結果は、賀茂地域局のホームページで公開していますので、ご確認ください。

最高学年を対象にしたアンケートの実施結果

●対象者　賀茂地域（１市５町）の 19 小学校、12 中学校、４高校（うち１分校）のそれぞれ最高学年の児童・生徒
●回答数　小学６年生：387 人（男：194 人　女：193 人）　中学３年生：429 人（男：225 人　女：204 人）
高校３年生：421 人（男：227 人　女：194 人）　合　　計：1,237 人（男：646 人　女：591 人）

Q ／今から 15 年後、あなたは賀茂地域に住んでいたいですか？

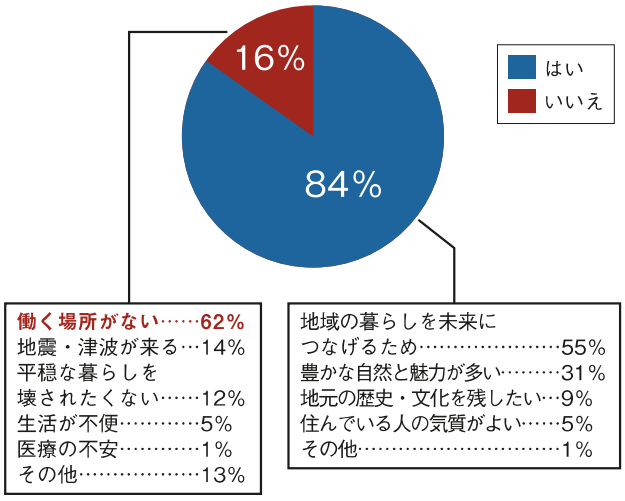


2016 年度調査と比較すると、住んでいたいと回答する児童・生徒は減少（７％減）　➡　**児童・生徒の地元離れの傾向は３年前と比べて加速**

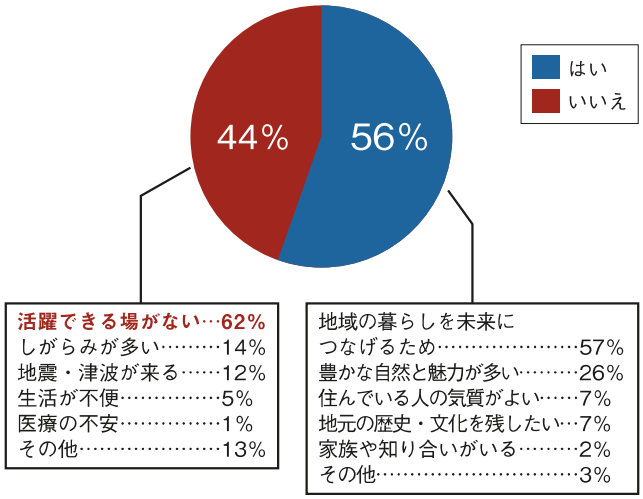
地域の大人を対象にしたアンケートの実施結果

●対象者　賀茂地域（１市５町）の全住民
●回答数　2,547 人（うち、Web アンケートによる回答 513 人）

Q１／将来的にもっとたくさんの人に住んでほしいと思いますか？



Q２／あなたのお子さんやお孫さんに地元に将来的に住んでほしいと思いますか？



地域のためには、もっとたくさんの人に地元に住んでほしい　➡　**自分の子や孫に対しては、外で活躍してほしい**

地域で輝く――賀茂のカリスマ！［1］

充実感と誇りを胸に

芸妓置屋「桝屋」天花（てんか）さん（下田市）

三味線の稽古に励む天花さん

右も左も分からぬまま花柳界に飛び込んで4年目。所属する芸妓（げいぎ）置屋「桝家」の女将（おかみ）奈美さんが「どこに出しても恥ずかしくない」と太鼓判を押すほど成長し、下田芸妓の顔として活躍する。

下田市出身。下田高卒業後、女優を志して上京。エンタメ系専門学校の「役者コース」で学んだ。アルバイトをしながら夢を追ったが、「生活も芝居も、いっぱいになってしまって」一時帰郷した。

そんな時、両親が経営する料理店で「芸者遊びを体験」という地元テレビ局の番組収録があった。「なんとなく知っていたけれど、こういう仕事が下田にあるんだ。きれい！いいな」と感激した。

「お姐（ねえ）さんたちに『体験だけでも』と誘われ「もともと着物が好きなこともあって」軽い気持ちで稽古場を訪ねてみた。実際に触れてみると「お堅いイメージとは違い、アットホームで、みんな明るく、にぎやかだった」。そんな雰囲気にもひかれた。

「お稽古は厳しい面もあるが、一曲一曲マスターするたび、達成感がある。お座敷やイベントで人に喜んでもらい、いろいろな人と出会えるのも楽しい。礼儀作法も身につき、人としても成長した。人を楽しませるアーティストという面では、女優と相通じる部分もある」。今、充実感と誇りを胸に、芸妓という職業に向き合っている。

とはいえ昨今、芸妓だけで食べていくことは難しい。それぞれ別の〝顔〟を持っている。天花さんも飲食店を開き、一人で切り盛りする。

若者の地元離れが進む中、「一度は都会に出たいという気持ちは分かるし、下田が一番良いとは言い切れない。ただ、疲れて帰ってきても温かく迎えてくれる人はたくさんいるし、やる気になれば何でもできる。狭い町なので関係が密。協力してくれる人もたくさんいる」とメッセージを送る。

休日には友人たちとわいわい騒いだり、好きな釣りを楽しんだりして過ごす、ごく普通の若者だ。

動画はこちら→

地域で輝く――賀茂のカリスマ！［2］

林業、新形態と若者雇用

林業の世界に飛び込んで11年。昨年に独立し今年4月、全国的にも珍しい樹木医事業の会社「HARDWOOD（ハードウッド）」を立ち上げた。南伊豆町を拠点に全国を飛び回り、樹木の診断や特殊伐採に活躍する。「林業の世界は今、収入面の問題などで若手が入っては辞めてしまう」と語り、新たな「稼げる林業の形づくり」と地元の若者雇用を目指している。

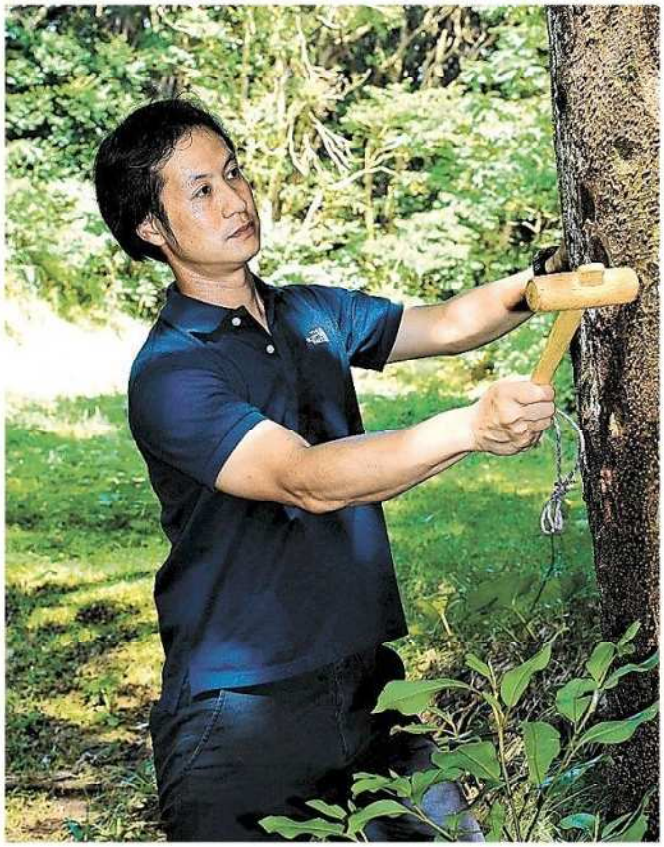
樹木医の仕事は木の健康を管理するもの。神社のご神木や街路樹などを診察し、病気治療や場合によって伐採をする。「専用の機器で人間のコンピューター断層撮影装置（CT）のように調べ、カルテを作る。治療できるものは治し、危険なものは伐採することもある」「住宅街の大木などはクレーンを使えず、人力で上から切る特殊伐採になる」と作業の流れを説明する。

仕事は全国から入って来るという。東京都や茨城県、鹿児島県奄美大島、ベトナムなどを転々とした。「都会の公園や街路樹には危険な木が多い。伊豆より都会にこそ樹木医の仕事がある」「伊豆を拠点に広く行き来をしながら仕事するスタイルになる」と語る。

東京都出身で13年前、趣味のサーフィンができる海に近いところへ住もうと同町へ移住した。東京時代はセールスドライバーで「朝から深夜まであくせく働き、生活に疑問が湧いた」「林業は環境を守り社会に貢献しているという実感が持てる」と仕事の魅力を語る。

伊豆の林業の課題は雇用環境という。「今の林業は山林整備などの補助金産業。若い人は入るが、給与面で厳しく数年で辞めてしまう。独身者はいいが、結婚し子どもができると難しい」と述べる。

「現状を打開しないと若手は残れない。全国で働ける樹木医の仕事や、都会の人を招いた木の伐採体験会など観光事業を組み合わせれば、林業は本来いろいろな稼ぎ方ができると思う。自分が地域の手本になり地元の若い人を雇用したい」と展望を語った。



木づちで幹をたたき樹木の状態を調べる森さん＝南伊豆町湊

樹木医会社「ハードウッド」
森　広志さん（41）
（南伊豆町）

動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
［3］

「釣りガール倍増計画」

港町の子浦でゲストハウスを営む松原さん
＝南伊豆町子浦

ゲストハウスDaja
松原　淑美（よしみ）さん（43）
（南伊豆町）

高齢化率7割超の限界集落にゲストハウスＤａｊａ（だじゃ）を構えて早2年。「人と人が交流できる場所をつくりたい」と古い民宿を改装した建物は、釣りガールや遠方の南伊豆ファン、映画の撮影隊が泊まるにぎやかな宿になった。「伊豆にはビジネスチャンスが転がっている。地域の魅力を探してほしい」と力説する。

青基調に整えられた宿の中は魚グッズがいっぱい。棚にはマグロの解体パズルや、磁石を使った魚釣りゲームが並ぶ。趣味であり、半分仕事でもある釣りの影響だ。

大阪府出身で２０１４年、釣り好きが高じて神奈川県から地域おこし協力隊として南伊豆町へ移住した。特に力を入れるのが「釣りガール倍増計画」だ。釣り船や竿（さお）のレンタルなどを仲介し、釣りの指導は自身が行う。18年には千葉県のビジネスコンテストで計画を発表し、大手食品会社とのタイアップも果たした。

釣りだけでなく、ごみ拾いを大切にしている。「海掃除は地域貢献になり住民とのつながりができる。つながりができればただの旅ではなくなり、南伊豆がまた来てもらえる場所になる」という。

宿泊のほか、協力隊時代の人脈を生かし「南伊豆コーディネート」の屋号で南伊豆の人や資源と外の企業を結ぶ仲介業も行う。起業して1年目に、町役場などの紹介で小説を原作とした映画撮影の話が舞い込んだ。19年夏公開の「いなくなれ、群青」だ。「隠岐の多い島と海の見える小学校が舞台で、ロケ地に子浦がすぐ思い浮かんだ。無事に誘致が成功した」という。

18年夏に行われた撮影ではＤａｊａが撮影隊の定宿になり、公開後はロケ地巡りツアーを企画して多くのファンを集めた。

ほかに地元のＮＰＯに所属するなど活動は多彩で、今後も南伊豆の魅力を発信していきたいという。「子浦は古い風待ち港で、レトロな路地や日和山登山など魅力はたくさん。私も楽しんでやっていきたい」と語った。

動画はこちら→

地域で輝く――賀茂のカリスマ！［4］

農業、林業をリンク構想

丸高農園 高橋 幸村さん（36）（松崎町）

栄久ポンカンの栽培に取り組む高橋さん

先祖が守ってきた松崎町の山と畑で林業、農業の２本柱で丸高農園を営む。開園５年が経過し、「小さな林業」「小さな農業」をモットーとしながらも、商品の価値を上げることで、経営安定を目指す。農業ではかんきつ栽培が中心だったが、加工品の開発に着手するなど、次のステップへと歩を進めている。

千葉県館山市出身。高校卒業後、東京農業大で林業を学んだ。家具職人としての修業期間を経て、静岡県森林組合連合会に勤務した。

松崎町には祖父母が住んでいたため、子どもの頃は毎年夏に訪れ、松崎の自然に親しんだ。祖父母が亡くなったことで、後継者が不在となった山、畑を守るため移住した。

「小さな林業」に特化した経営を目指す。「伊豆半島は現場まで大きな重機が入れないようなケースが多い。小さな機械、少ない人員で低コスト化を実践することで、地域の需要に応えられるような経営を行っている」という。小規模ながら品質にこだわり、伐採した木材のうち４割は建造材として使用される「Ａ材」に加工し、販売する。

農業では松崎町発祥で、甘く濃い味が特徴の栄久ポンカンを生産する。今でこそ町を代表する人気の農産物だが、かつては町民にも認知されていない品種だったという。同じく大規模に生産する町内の三余農園と協力し知名度向上に励んだ。２０１８年、松崎ブランドに認定され、品質向上の取り組みも実を結び、今年１月の町農業振興会・果樹部会が主催するポンカン品評会で最高賞の金賞を受賞した。

現在はかんきつを加工した１００％ジュースの商品化にも取り組んでいる。農業と林業をリンクさせた事業の構想も温めている。先祖代々の土地を守る高橋さんは自身の使命を「続けていくこと」と考える。「曽祖父の代から続く事業を終わらせるのは簡単。だが自分にバトンが渡された。自分の代でできることをやり、次の代にバトンを渡すことが自分の役目」と語る。

動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
［5］

潮かつお〝復活〟商品化

西伊豆町で縁起物、お供え物として伝承される潮かつおを中心に、地元の特産品などの加工を手掛ける水産加工食品会社の社長。

食文化の変化で消えつつあった潮かつおを加工することで現代人にも受け入れられるようにし、〝復活〟させた。「周りからは『西伊豆の奇跡』と言われた。北海道から沖縄県まで潮かつおの商品を広めたい」と夢を語る。

実家の鮮魚店を継ぐため、約20年前にアパレル関係の仕事から転職した。当時は周りにスーパーができるなど、厳しい時代。そんな中、幼少期によく食べていたが、忘れ去られていた潮かつおに着目した。しかし、みそやしょうゆの代わりに使われていた潮かつおは、そのまま食べるには塩分が強すぎるため、〝食べやすさ〟を目指した。

第1弾として考案したのが「万能塩鰹茶漬け」。子どもの頃に、祖母が余った潮かつおをすり鉢で粉々にした後、ゴマや岩のりと混ぜて備蓄していたのを参考に商品化した。

しかし、周囲からは「潮かつおなんてしょっぱくて、生真い」「縁起物だから切ったり、焼いたりしてはいけない」などの声が相次いだ。数カ月かけて住民らに「後世に残していくために、需要をつくらなければいけない」などと熱く語り、説得して回った。

自ら町内外の土産店などに足を運んで営業活動を展開、どこでも「万能塩鰹茶漬け」が並んでいる環境を作った。それからは茶漬けのほか、ふりかけなど、味に加え、手軽で多様な食し方が口コミで広がり、人気商品となっていった。

「おいしいと言ってもらえることが多く、とてもやりがいを感じる。これからはより潮かつおに特化した商品を考案し、知名度を広げていきたい」と意欲的だ。

これまでの経験から、若者に向けて「自分がやりたいことを見つけたら、絶対に諦めないことが大切。挑み続けてほしい。その中で必ず光が見えてくる」とエールを送る。

潮かつおを使った商品について熱く語る中島さん

三角屋水産
中島　繁さん（50）
（西伊豆町）

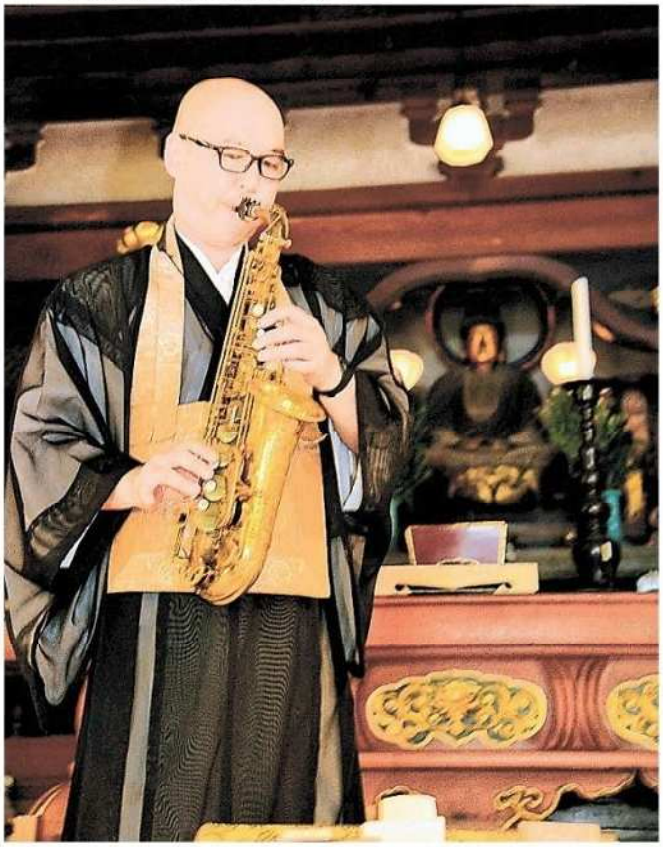
動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
［6］

「寺は地域社会の中心」

異色の僧侶。けさをまとってサックスを奏でる。「寺は地域コミュニティーの中心」と語り、住職を務める河津町谷津の古刹（こさつ）、栖足（せいそく）寺（じ）と周辺の活性化に意欲的に取り組む。

本尊を背に華麗にサックスを奏でる千葉さん＝河津町谷津の栖足寺



栖足寺住職
千葉　兼如（けんじょ）さん（46）（河津町）

東京都八王子市の一般家庭に生まれ、会社員、サックス奏者から一大決心をして同寺に婿入りし、「まったくの無縁だった」という仏門をたたいた。

延べ６年に及ぶ道場修行、義父を補佐する副住職を経て「かっぱ寺」の愛称で親しまれる同寺の第33代住職に就任した。音楽家の経験を生かした音楽法話、本堂に映像を投影するプロジェクションマッピングなど、封建的な寺院に新風を巻き起こす。狙いは布教に加え、寺町の再興にある。

「本寺がある地域も若者が都会に出て過疎化が進み、商店の多くは跡取りがなく店じまいした。一方、寺には檀家が法事や墓参りに時折訪れるだけ。私の使命は多くの人に寺に親しんでもらい、地域を元気にすること」

地元の若手経営者ら有志６人で「てらまち会」をつくり、タイの乗り物「トゥクトゥク」を購入して同寺と仏像展示館のある南禅寺の間を運行している。河津バガテル公園ではプロジェクションマッピングのイベントを行うなど活動領域を広げ、地域活性化を担うグループとして注目を集める。

そうした活動が実を結び、同寺の年間参拝者は約５万人に増加した。一度は寂れた寺町に観光客の導線ができつつあるという。

「私たちの活動に住民も率先して協力してくれるようになり、手応えを感じている。活性化した地域には人が集まり、そこには雇用が生まれる。ネットによって地方から世界に情報を発信できる時代。田舎の不便を嘆くのではなく、不便を楽しむぐらいの意識を持ちたい。伊豆には可能性があふれている」

今も煩悩を捨て去る努力を続ける。そんな修行のさなかにあって「愛という煩悩だけは捨てられない」と笑い、本尊を背に自慢のサックスで魂のジャズを奏でた。

動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
［7］

郷土の医療・福祉担う

訪問看護ステーション「愛菜花（あいさいか）」
小池　美帆さん（46）
（東伊豆町）

経営者であると同時に看護師としても最前線で活動する小池さん＝東伊豆町稲取

東伊豆町にある訪問看護ステーション「愛菜花」代表。経営と同時にケアマネジャー、訪問看護師として走り回り、在宅利用者の暮らしを支援する。

大好きだった祖父の死に直面した中学時代、「私に何かできなかったか」との自問自答から看護師を志し、伊東城ケ崎高（現伊東高城ケ崎分校）、国立伊東温泉病院付属看護学校を経て、同病院（現伊東市民病院）に15年間勤務した。

外科病棟に勤務していた27歳の頃のこと。「家に帰りたい」「家で正月を過ごしたい」ー。年の瀬の夜勤で入院患者が漏らした言葉が胸を締め付けた。「看護師でありながら何もしてあげられない自分」を思い知り、このことが後に訪問看護事業を立ち上げる動機となった。

その後、ケアマネの資格を取得。家庭の事情から病院を退職して専業主婦として〝充電〟し、子育て・家事と両立できる仕事として2015年にケアプランセンターを起業した。

事業が軌道に乗った頃、軽い風邪であるとの理由から入院もできずに家で独り寝込む認知症の利用者に接し「私は看護師。24時間稼働の訪問看護師であれば、そばにいてあげられるじゃないか」と、18年、27歳のあの夜から、心の重しとなっていた訪問看護事業に乗り出した。

サービスエリアは自宅のある東伊豆町と河津町。現在、自身含めケアマネ3人、看護師4人のスタッフで少子高齢化、過疎化が進む郷土の医療・福祉の一端を担っている。

モットーは「利用者の声に耳を傾け、寄り添う気持ち」。「人それぞれに考えは違う。心を閉ざす人もいる。無理にこじ開けるのではなくただ寄り添う。そんな気持ちでやっている」と語る。

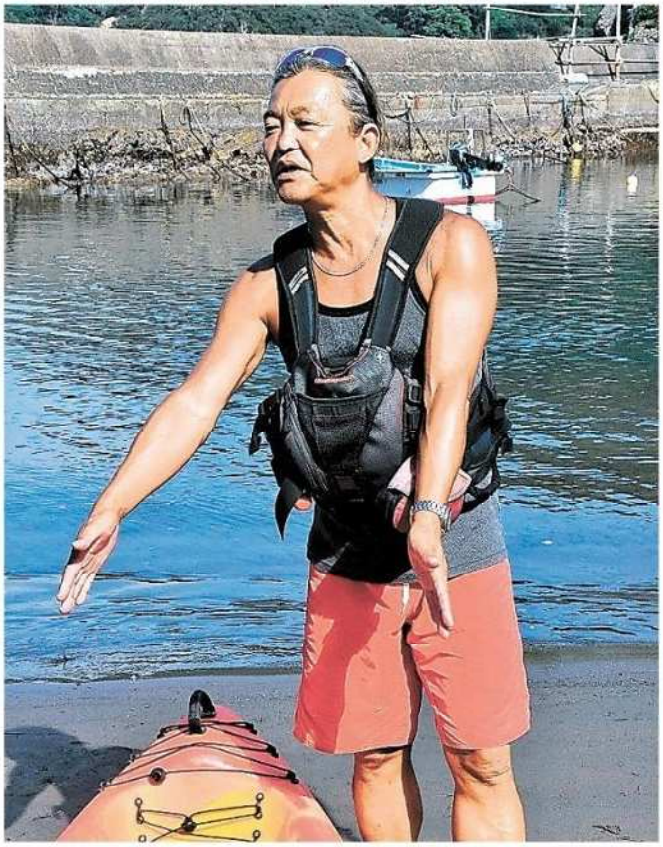
事業所名は、子どもの名から1文字ずつ取って命名した。好きな仕事を続けられる原動力については「家族の支えがあってこそ。あとは強い思いを持ち続けることかな」とほほ笑んだ。現在はキンメ漁師の夫、小学生の娘と暮らす。

動画はこちら→

地域で輝く――賀茂のカリスマ！［8］

自然体験「産業化」目指す

NPO伊豆自然学校理事長 鈴木 達志さん(56)＝西伊豆町



利用者にシーカヤックの乗り方を優しく指導する鈴木さん＝西伊豆町田子

西伊豆でしかできない自然体験プログラムを提供するNPO法人伊豆自然学校の理事長。「西伊豆のたっちゃん」の愛称で利用者に親しまれ、西伊豆地区の自然の魅力を発信し、地域の活性化に貢献する。

神奈川県茅ケ崎市出身。2005年に西伊豆町に移住し、12年に伊豆自然学校を設立した。シーカヤックやシュノーケリング、キャンプなどの自然体験のほか、波にもまれて角の取れたガラス片のシーグラスや貝殻、流木などを使った工作体験事業も展開する。

幼少期の頃から山や海、川で遊ぶことが多く、自然によく親しんでいた。会社員時代の約30年前、海外駐在員としてクウェートに滞在中、湾岸戦争に巻き込まれ、イラク軍の人質として4カ月を過ごした。背中に銃を突き付けられて死をも覚悟。その時「生きて日本に帰ることができたら、自分が好きなアウトドアの仕事をしよう」と決心し、帰国後に自然体験事業を始めた。

現代は自然の中で遊ぶことが少なく、危険を認識できない子どもが多い。そのため、「安全・安心に遊んでもらうことが私たちにできる一番のサービス」と心に刻む。子どもたちは初めて触れる〝ゲームよりリアル〟な自然の世界に、目をキラキラさせるという。考える力や観察力を養ってもらうため、「たっちゃん、これ何？」と聞かれてもあえて答えは教えない。

そんな子どもたちよりも自然体験に夢中になるのは、一緒に来ている父親だという。「大人が子どもに戻ったように楽しめることも自然の魅力の一つ」と笑う。

今後は自然体験の「産業化」を目指す。農業や漁業の体験プログラムを考案し、地元の農家や漁師がガイドをすることで、収益を得てもらう。その結果、地域の活性化につながり、働く場所や働き方などの選択肢が増えるため、若者の流出も防げると考える。「西伊豆の自然は当たり前ではない。もっと多くの人に魅力を知ってもらいたい」と語る。

動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
［9］

「美しい植生表現したい」

フラワーアーティスト
後藤 清也 さん(31)
＝河津町

フラワーアレンジメントに取り組む後藤さん
＝河津町沢田の伊豆ばら園

フラワーアレンジメントにとどまらず、花を中心とした空間演出やライフスタイルをも形にするフラワーアーティスト。主宰するアレンジメント教室には〝イケメン先生〟目当てに小田原市や熱海市など遠方からも女性ファンが足しげく通う。

河津町沢田で両親が営む伊豆ばら園で幼少の頃から花に親しみ、下田北高(現下田高)、東京の花の専門学校を経て都内のウエディング会社に就職。花の部門に3年間勤務した後、自己表現の創作を開始した。アルバイトをしながらコンテストに挑戦を続け、２０１６年に全国的な競技会で優勝、アーティストとして自信を深めた。

その後、「自然からインスピレーションを得たい」と巨大マーケットである東京を捨てて帰郷。自宅にデザイン事務所「ＳＥＩＹＡ Ｄｅｓｉｇｎ」を置き、河津バガテル公園にスタジオとアトリエを兼ねた「カフェ オルテンシア」を出店した。

表現者として大切にしているのは「植生」。「花屋できれいに咲く花よりも、野に咲く花や、動物に踏まれたり、台風で折れたり花びらが欠けたり、枯れてしまったりしても美しくある植生を表現したい」と語る。

自己表現のアート、依頼を受けて手掛けるデザインに加え、産品の企画、開発など活動領域は幅広い。両親の協力で栽培する食用バラを使って商品化したバラのジャムは内外の注目を集める。

「河津町のふるさと納税返礼品に登録された。商社からは中国での販売の話ももらっている。河津町の特産品に育て、伊豆から世界に発信できたらいい」

果敢な挑戦の動機の一つは〝花業界は稼げない〟というイメージを打ち破ること。「自然に携わる仕事でもちゃんと稼げることを証明したい。大人が輝いていてこそ子どもが夢を持てる。そのためにも僕自身キラキラと輝いていたい」と屈託なく笑った。

近く伊豆ばら園の売店を改装し、新しいスタジオとアトリエを新設する。イケメン先生の夢は尽きない。

動画はこちら→

地域で輝く——賀茂のカリスマ！［10］

山から海へツアー展開

西伊豆の古道を再生し、マウンテンバイクのツアーを展開する松本さん＝松崎町松崎

西伊豆の山を〝回す〟ベーストレスの社長。アクティビティー（体験活動）ガイドとして山を活用した新しい観光を展開する。

ベーストレス社長 松本潤一郎さん（38）＝松崎町

横浜市出身。10代の頃からヒマラヤ山脈やアンデス山脈など海外の山を中心に旅をした。「自然豊かな地域で暮らしたい」と25歳の時、松崎町に移住。西伊豆地区を選んだ理由を、「電車がなくて不便だから。本当に自然が好きな人が集まると思う」と語る。

海外では山が観光資源となっているが、伊豆の観光は海がメインで、山が活用されていない点に着目したという。山中に埋もれた古道の存在も知り、マウンテンバイク（MTB）を使ったトレイルツアー実現のため、２０１２年に「西伊豆古道再生プロジェクト」を立ち上げた。

重機も入れないような古道を、チェーンソーで倒木を切ったり、堆積した落ち葉や枝を除去したりして整備した。5、6年かけ約40キロのコースを完成させた。現在では、関東圏などから多くの人が訪れ、西伊豆の山の魅力を堪能している。

また、10年間で宿泊施設が半分に減少していることに気付き、18年に伊豆の旅の拠点を目指した宿泊施設「ロッジモンドー聞土ー」を西伊豆町仁科にオープンした。内装には古道再生で伐採した木を再利用、木の形をそのまま生かすなど細部にこだわりを見せる。

今年からはシーカヤックに乗って釣りをするアクティビティーも展開する予定で、西伊豆の〝海も回す〟考え。山の水が海に流れていくように、これからは山のツアーに加え、海のツアーも広げていく。釣れた魚は地元の飲食店に持ち込み、店で食べることで、地域の活性化も図る。

地域の若者が都会へ流出する現状について、「小さな世界にいるだけでなく、外を見ることはとても大切だと思う」と話し、「人が減っているといわれるが、それは絶好のチャンス。自分が動けば、何でもできる。雇われている場合ではない」と可能性に満ちた若者にエールを送る。

動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
[11]

「育てた種、収穫の時期」

デザイナー
佐藤 潤 さん（46）
＝下田市

デザイナーやフォトグラファー、コミュニティスペース「羽衣」を運営する団体「ゆるいず」共同代表など、さまざまな"顔"を持ち、活気ある地域づくりのため、忙しい日々を送る。

地域の魅力を引き出す写真撮影に励む佐藤さん
＝下田市のペリーロード沿い

下田市出身、在住。下田北高（現・下田高）、日本女子大人間社会学部を卒業。都内にある印刷会社や、家業の看板制作会社などで働きながら学び、デザイナーとしての下地をつくった。10年ほど前、フリーとなり、個人のチラシ、パンフレット、名刺作成といった仕事を手掛けている。5年前には、下田商工会議所のゆるキャラ「ぺるりん」を発案し、採用された。「初めてこの仕事でやっていけるかもしれないと自信が付いた仕事だった」と振り返る。

仕事でカメラを使う中で、同商議所が進める下岡蓮杖プロジェクトの一環として発足した「下田写真部」のメンバーになり、撮影技術を磨いた。4年前には、都内で展覧会を催し、下田の魅力を発信、下田ファンの獲得に力を尽くした。

下田市旧町内の活性化を目指す「ゆるいず」を設立し、空き家の有効活用などを進めてきた。一つの成果が同市一丁目の空き家を改修したコミュニティスペース「羽衣」だ。会員制で貸し出し、首都圏や地元の人がイベントを開いたり、着物の着付けサービスや宿泊ができる施設で、約1年前にオープンした。

「失敗も含めいろいろなことを試させてもらった。そんな中、下田の町や個人商店の良さを紹介するイベントをいくつか開くことができ、成功したと思う。口コミやSNS（会員制交流サイト）などで、話題が広まり利用も増え、手応えを感じている。ありがたい」と話す。

「ここ5、6年いろいろな可能性の種をまいて、大切に育ててきた。そろそろ仲間と一緒に収穫する時期。今後も、埋もれている地域や個人商店の良さを知ってもらうことに力を入れたい」と目を輝かせ、「一人では何もできないので、新しい下田を一緒につくろう」と地域に呼び掛ける。

動画はこちら→

地域で輝く――
賀茂のカリスマ！
［12・完］

空き家をリノベーションしたゲストハウスを開業し、稲取の魅力発信に意欲を示す荒武さん＝東伊豆町稲取の「錆御納戸」

稲取の風情、魅力伝えたい

NPOローカルデザインネットワーク理事長
荒武　優希さん（29）＝東伊豆町

東伊豆町の元地域おこし協力隊員。任期を終えた後も町内にとどまり、人と人をつなぐイベント、空き家の再生などの地域おこしを実践する。

横浜市出身。芝浦工業大で建築を学び、同大大学院在学中に学生が自主的に企画、実行する「学生プロジェクト」で稲取の水下地区老人憩いの家、消防団第6分団旧詰め所の再生に携わった。同詰め所は「食」をテーマにした交流施設「ダイロクキッチン」に生まれ変わった。

その後、NPO法人ローカルデザインネットワークを立ち上げ、町と連携した空き家改修プロジェクトなどを推し進めた。さらには自由な発想で自身の夢を実現する会社「so－an」を今春設立し、大学院修了と同時に「大学では得られない体験や学習をしたこの土地で、東伊豆の魅力を発信する手伝いがしたい」と第1期地域おこし協力隊に応募し移住。ダイロクキッチンの運営に当たり、地元食材を使った料理教室、商工会青年部と協力した空き店舗活用イベントなど、多くの地域活性化事業に奔走した。

事業第1弾として稲取の路地裏にこのほど、ゲストハウス「錆御納戸（さびおなんど）」を開業した。

クラウドファンディングで集めた資金などで空き家を改修した宿は温泉も豪華海鮮料理もなく、素泊まりが基本。さび色と日本家屋の納戸から命名し、古い民家の雰囲気をそのままに「港町・稲取の暮らしを旅する」がコンセプトだ。

「高台から見ると家々が整然と建ち並ぶ街だが、一歩足を踏み入れると道が迷路みたいになっているのが稲取。ごちゃごちゃしているようで地形からの成り立ちなど必然性がある。そんな港町・稲取の風情、魅力を知る旅の拠点として使ってほしい」

今後も空き家の再生などに取り組む予定。「挑戦の先には人との出会いがあり、自分自身の成長がある。この土地に住み続けたい、働きたい、遊びに来たいと思っている人たちの応援ができたらいい」と語った。

動画はこちら→

協　力：伊豆新聞下田支社・賀茂管内ケーブルテレビ局
発行元：静岡県賀茂地域局　〒415-0037 静岡県下田市敷根 765－15　TEL:0558-24-2202　FAX:0558-24-2205